

## poco.a.poco 美容室 × アート

## Writer

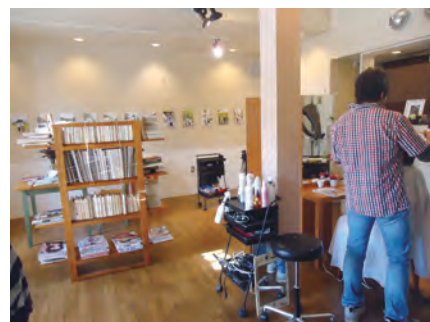
松尾 寛子 MATSUO Hiroko

筑波大学芸術専門学群  
芸術学専攻 2年

つくば市にある小さな美容室、poco.a.poco。暖かい日差しが降り注ぎ、のんびりとした音楽が流れる店内の壁には、様々な絵や写真が飾ってある。poco.a.poco は美容室でありながら、ギャラリーやイベントスペースとしても空間が活用されているユニークな美容室だ。美容室で作品を展示する poco.a.poco の狙いとは何か、店長の高橋一哲さんにお話をうかがった。



poco.a.poco の外観



店内は美容室と展示スペースが共存している

## きっかけはお客さん

poco.a.poco が開店したのは 1996 年の 2 月 4 日。なんと今年で 18 年目になるといふ。ギャラリーとして店内を使い始めたのが 16 年前。筑波大学国際総合学類出身の写真家、ヤマグチイッキさんの個展をしたのが最初だそう。

「彼は学類の 1 年生の時からカメラを担いでお店に来ては、写真を撮ってくれたり見せてくれたりしていました。その彼の写真というのが、見ていてすごく幸せになれる写真だったんです。それでうちで個展をやってみないかという話になりました。最初は国際総合学類の人たちがこの店に出入りしていて、そのつながりで彼も店に来ていたんじゃないかな？ 彼は沖縄県出身で、沖縄のヤギの写真をよく撮っていました。それがとてもいい写真で。あいつが学群生だった間にここで 2～3 回展示をやりました。それで、彼のおかげでこんなところでも展示ができるんだという確信がもてました」

イッキさんの個展をきっかけに、作品を制作しているお客さんに展示をやってみたいかと声をかけるようになったという。もちろん、お客さんの中には筑波大学芸術専門学群の学生もいる。

「作品を飾りたくても飾れる場所がないだったら、とにかく飾ってみようっていう話をしている。そんなことを何年もやっているうちに、最近は不思議と作品を展示したい人が集まってくるようになりました」

## 双方にとってのプラス

poco.a.poco では作品の展示者からお金は一切受け取らない。それは、展示をする側とお店側双方にとって、プラスになるものがあるからだそう。

「作品を展示する彼らにとっては作品を見て知ってもらうということがメリットになる。それに対して、僕らの店のプラスになるとは何かと考えたときに、いろんな人が見に来てくれることかなと思った。それがお店の空気を良くしてくれている。あと、壁に作品を飾ってくれるおかげであれこれ飾りつけなくていいというか、作品が全てお店を演出してくれることがプラスになっているんじゃないかな」

美容室という場所の性格上、訪れるお客さんの数はどうしても限られてしまい、いつも特定の人が店を出入りする。そのような場所では、その内側の人でしかない停滞した空気感になりがちだ。そこにギャラリーという要素を加えることで、普段は美容室を訪れないような人が作品を見に来てくれるようになる。そうやって来た人の流れが、店内に新しい風をもたらしてくれるのだ。

「ギャラリーは展示スペースを貸すことによって利益を上げているけれど、僕のところはあくまでもそれはしない。得るものでそれ以上のものを貰っているし、展示してくれた方も知り合いになれるしね。その人がまた違う人を連れてきてくれたりして、人の輪がどんどん広がって

いることがとても嬉しい。作品って大事ななんだってことも、展示をやることによって教えてもらった。芸術の人たちの作品ってすごく一生懸命作っていて、身を削って作っているんだろうなって。逆に勉強させてもらっているから、感謝しなくてはね」

## お客さんを飽きさせないための工夫

取材をする中で驚いたのが、お店を訪れるたびに店内のディスプレイが変わっていたことだ。これには高橋さんもこだわりを自負していて、聞けば、一回も同じところに机や椅子を置いたことはないという。気分が詰まっているときなどに、朝から思いきって配置を変えることで、気分を一新するのだとか。

作品を展示することも、ある意味では内装を変化させることである。壁の作品を変えるだけでも、店内の雰囲気はがらりと変わる。作品を変えただけで、壁の色を変えた？ と聞いてきたお客さんもいたそう。まして、展示をしている期間中は、店内がその作家の色一色に染まる。

「展示をしている期間だけでもいいから、その人の空間になっていることが一番うれしい。そこで仕事している僕はとても幸せでね、多分芸術をやっている人たちは自分の世界観をしっかりともっていて、それをここで遠慮せずに存分に出してもらおうことが一番いいんだ」

高橋さん自身、絵や写真を見ることは昔から好きだったそう。あまり深いことは考えずに、見ていて心地の良い作品をただ眺める。店内にある絵や写真は全て、今までに poco.a.poco で展示をした人の作品だ。高橋さんが特に気に入ったものを貰うか買うなりして飾っているという。そうして作品を飾っているうちに、壁の作品を見てくれるお客さんが増えてきているそう。

「アートってセラピー的な側面もあるしね。美容室もセラピーの要素がすごく大きい。だから、それを望んでくる人を満足させてあげられると、とても喜んでくれる。特に女性はそうよね。その中で、

その店の雰囲気とか、飽きさせない要素っていうのはすごく大事だと思う。模様替えするのもその為なんだけど。まして、飾る絵が変わっていることはすごく喜んでくれるし。中には見ない人もいるんだけどね。でも、だんだんここに絵が飾ってあるってことが分かってきて、必ず壁を見てくれるお客さんも増えてきて、絵を見る癖がついてきているなって感じる。逆にそういう癖をつけてもらうと、壁に作品を飾っていない時はさびしうにするから、また何かやってみようというやる気が起きる」

## この街だからこそ

「つくばという街だからこそ、僕の店のよなことができるのかもしれない」と高橋さんは語った。つくば市は今年で市政 25 周年を迎える。市というまとまりで見ると、まだまだできたばかりの新しい街だ。ここでは様々なことが真新しく、興味を持って人々に迎えられる。poco.a.poco のような活動も同じく。

「つくばだからこそ、出来る事がいろいろある。特に今はタイミング的にも一番いい時かもしれない。一人一人が繋がってこうという力が強いから、今のつくばでは若い人たちがあちこちで様々な活動をしている。これが安定してきたら、その力が弱まって保守的になるかもしれないね。それでも僕はこのような活動を続けていきたいと思う」

大きな大学をもつ、つくばは人の流動も



このときは、フォトグラファーのイッキさんの展示が行われていた

激しい。高橋さんは、新しく来た人たちに、つくばはつまらない街だと思われるのがとても悲しいという。だから、つくばのお店もそれぞれがつながり合い、動き出しているそう。つくばの地域力が今、生まれている。

## 人と人のつながり

高橋さんは今後も展示を続けていって、継続的に毎年展示してくれる地元の人ができればいいと考えている。その合間に学生にも展示をやってもらい、地元の作家とつながりを持ってもらえたらと話す。今後 poco.a.poco も変化をしていくだろう。でも、大切なもの、つまり、お店のコンセプトとか、作家やお客さんとの関係性は変わらない。高橋さんは「つながる」ということを大切にしているようだ。

「人付き合いって大切だと思う。例えば友達が来て、その友達がいいやつなんだよっていろんな人に教えてあげたいじゃない。だから、自分が好きなものは伝えやすいし、それを 100 人集めて紹介するよりも自分の周りの近い人たちに紹介して行って、それがどんどん広がっていったらと思う。震災以降、人のつながりが強調されて、どんどん人がつながっている感じがする。だから、多分もっともいろいろなことが出来るかもしれない。有名な人ではなくて、頑張っている人をこれからも応援していけたらと思う」

poco.a.poco では、お店とお客さん、また、作家とお客さんがつながる間にアートがある。ギャラリーを通じて、これから先、どのような人や物がつながり、広がっていくのだろうか。



こちらは、筑波大学芸術専門学群の大政 愛さんによる展示の様子（「Hidamari-ten」2012.3.13～4.19）